

アーツセラピーの5系統 **～全国実態調査に基づく再分類～**

アーツセラピーの目的や内容は多岐にわたっている。それらを混在させた状態では生産的な議論はできない。まず、甲南大学人間科学研究所が2008～12年度に行った「アートセラピーの実態調査」では、セラピーの目的および目標とする効果を基準に、「自分探し・自己啓発系」「心理療法系」「リハビリテーション系」「表現系」の**4系統に分類**された。さらに ATAS の全国実態調査の結果から、ここに「**発育支援**」を加え **5系統**とし、系統名も改訂した。現況は2021年度版である。

心 理 療 法 系	専門的な診断と治療の必要な人が対象。問題・症状の緩和や治療の中心的あるいは補助的な手段として活用。 目指す内容として自己探求系と重なる部分が多い。
自 己 探 求 系	比較的健康度の高い成人が対象。気晴らし・ストレス解消・保養・癒し・自己解放・自己発見・自己肯定・QOL向上などが主な目的。その他、問題に向き合う、精神疾患を予防するなど。心理療法系につながる場合もある。
リハビリテーション系	脳機能障害者や高齢者が対象。身体機能回復、症状の進行抑制・緩和・安定などを行うことが主な目的。 リハビリテーションを補助する、あるいは牽引するものとして活用。 心理面にも関わるが、基本的に心理療法とは異なる。
発 育 支 援 系	発達段階にある子ども・若者が対象。抑圧からの解放、自己表現の促進、自信の獲得、自己肯定感の向上などが目的。種々の障害児に対しては「療育」の一手段となる。いずれにも子育て支援の要素が含まれる。 心理療法につながる場合もあるが、基本的に心理療法とは異なる。
表 現 支 援 系	知的障害や精神障害のために通常のコミュニケーションや社会生活が困難な人、あるいはそれらの症状の表れとして内発的に表現活動を行なう人を対象とする。非言語的な表現行為によって外部世界と接触・交流ができたり、充実した時間を過ごすことができたりすることで、QOLを向上させることが主な目的である。その結果としての制作物がアート市場に出る可能性が最も高い。心理面にも関わるが、基本的に心理療法とは異なる。

このような分類、区別は、境界づけや分断・限定が目的なのではなく、多種多様なアートセラピーの混沌とした状況に一定の目安をつけ、適切な理解や評価が可能となるようにすること、また活動家にとっては、自己の立ち位置が認識できるようにすることがねらいである。また、実際の活動内容は横断的で重なるところ、活動内容によって、同じ活動家でも系統間を移動することがある。

また、系統名は最終決定されておらず、可能な限り実態を示すものとなるよう随時再検討をはかっている。

系統名解説

[発育支援系]

ATAS による全国実態調査では、「療育」や「学童保育の支援」を目的にするアートセラピーの活動が把握された。自己形成が進行中の子どもに対するアートセラピーは、大人を主たる対象としたアートセラピーに比べ、育成という観点から教育的機能と自我の発達に対する評価が強く意識された実践がおこなわれている。これは心身の発達段階が成人レベルに達しない、社会化の途中である子どもに対する特有の現象である。しかし、4分類法では子ども達は各系統に紛れ込んだ状態になり、18歳までの児童全般の育成支援や情操教育的支援、発達障害児の育成支援の要素が見落とされてしまう。

ここでは障がいの有無に関係なく全ての子どもが対象となるため、発達障害児支援の意味合いが強い「発達支援」ではなく、「発育支援」という名称を用いた。

[自己探求系]

甲南大学人間科学研究所の調査研究で採用された「自分探し・自己啓発系」という呼称を「自己探求系」と改称する。旧称ではこの系統の全体像を押さえることができないこと、また旧称は様々な文脈-----過去に社会問題化した自己啓発セミナーなど-----で使われてすでに何らかの評価をまとめていること、その結果、内実を客観的かつ価値中立的に指示しないこと、がその理由である。

2015年時点での改訂では、価値中立化をはかるため、「自己探知系」という聞き慣れない名称を採用していた。しかし、「探知」という語は、客体として固定した自己を探り当てるニュアンスが強く、アートセラピーで生じる自己の変化・発展について示せないため、「自己探求」に変更した。

[表現支援系]

甲南大学人間科学研究所の調査研究で採用された「表現系」では、支援・エンパワーを行う側ではなく対象者が主体となっているので、「支援」を加え、適正化した。